

5. 中国長江流域にみる編物（網代）について

—曾畠出土資料と関連して—

別府大学学長 賀川光夫

(一)

縄文時代後、晩期に編布が存在すること、編布以前にカゴやムシロなどの編物があることなどは出土遺物や土器底部圧痕などにより指摘されてきた。⁽¹⁾特に渡辺誠は考古資料に加えて民俗学的アプローチから編器や、編機に及び詳細な研究をおこなっている。しかし編布、編物などの研究は資料の制限もあって全容を知る手掛かりに欠けるところが多かった。このたび調査が行われた、曾畠貝塚低湿地遺跡は有機質遺物を多数含み保存可能な泥炭層であり資料の包蔵条件をそろえていた。そのため、これまでに類例をみないほどの編物資料が出土した。

編物は採集、狩猟、魚撈、運搬など様々な用途で古くから生活の主要な道具として利用されてきた。温和な気候条件の日本列島は、各種材料に欠けるところはなく、編物においては巾広い道具として利用してきた。材料としては、楮、栲または桺の他葛も使用されていたし、藤も、竹も使用されていたと思われる。古文にみえる「白たい」「白にぎて」は材料として「楮」または「栲」があてられ、古典にあらわれる木綿などの編物は「ゆう」と読ませてすべてこれら「穀木」を材料としている。しかし、編物の材料はこれら古典に出てくるもの他、古くは広葉樹のカシ、ブナなどの繊維がもちいられることが考えられておく必要がある。

⁽²⁾編織布については葛布についても検討を加えるべきであり、この技術は静岡県掛川市周辺において近年までおこなわれていた。葛の繊維は硬くのびないので緯糸にしかつかえなく、^{よいと}経糸には木綿、麻を使用していた。これまでの出土資料の中で葛と木綿を使いわけたものを明らかにした例はないようと思うが、渡辺誠の指摘にも経糸はやわらかい蔓材、緯糸は糸状の繊維がもちいられている例があり、このような編布またはカゴが存在した可能性も確かめる必要がある。

「栲」は本来柳を折り曲げてつくったものとされ「栲」と混同しているともいわれる。「栲」もまた「楮」と同じとする説もあるので、木綿の材料を選定するのはむずかしい。木皮や繊維など「葛」を含めて多種類に及ぶものと思われる。したがって数多くある道具を大別すれば編布と網代の二種類にしておけばあまり混乱がなくてすむように思う。「網代」とすれば、材料は、竹も葦などを含むことになるから問題はなかろう。竹は本来、木でもなく、草でもなく「いぶかしき」ものであるから、木説、草説の両者をよしとして、編物の材料には好適で、予想以上に使用されていたものと考えることができる。

さて、ここで43号貯蔵穴から出土した網代と、曾畠式土器との編技法と文飾技法を対比してみると、かなりの共通点がみられるよう思う。編技法と土器文飾は、経、緯糸のからみ合いの技術と、そのモチーフによるとみてよい。私は両者の関係に興味をもっていたのであるが渡辺誠のカゴ底圧痕（御経塚遺跡）に対する指摘や浙江省河姆渡遺跡出土の「編織文骨匙」文飾と曾畠式

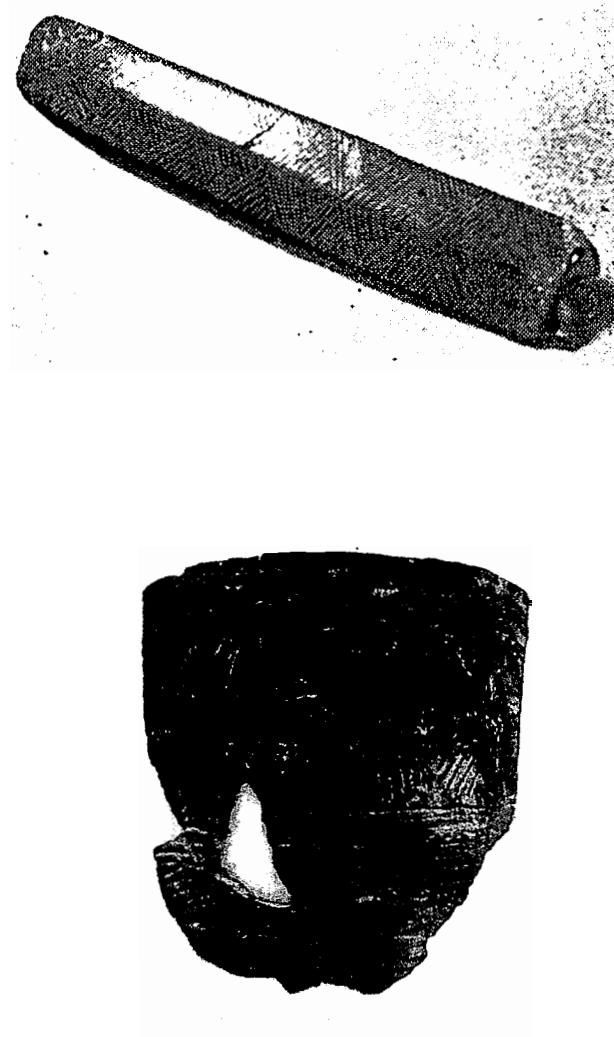


図1 文様構図上の類似

上 河姆渡遺跡出土「編織文骨匙」

下 曾畠出土土器文様（編織文様？）

上は『文物』1980年、5.より転写

土器文様の比較（図1）などその他若干の資料によって思考を強めることができた。曾畠式土器の文飾が編技法の技術をモチーフとしたことになると、縄文時代における編器の利用について一段と注目しなければならぬ。

(二)

さて編器の材料に麻、綿以前の「穀ち木」や竹などをもちいたとすると、温暖な草木について注目しなければならない。考古資料からこれを隣接の中国大陸にその資料を求めることができるであろうか。近年考古学研究に自然科学的アプローチが主要な課題となりつつある。日本を含む隣邦諸国の植生に対する研究は、大きな成果をあげており、生活に関連のある資源のとりあつかいについても注目されるようになった。このことは中国考古学会においても同じである。⁽⁴⁾

中国では先史時代の初期から編織の技術が存在していたとみられる。河北省武安県磁山遺跡は安志敏によって年代考証がおこなわれ、仰韶文化以前（早期）として編年される。⁽⁵⁾ 土器の分析は勿論のこと、⁽⁶⁾ ^{14}C の検査をもって中原新石器文化を対照して新石器文化の源流を論述している。この最新の考察によれば、紀元前5～6000年前（Z K 439、- B C 5400～5200）の間に比定されている。更に中国社会科学院考古研究所における「碳14年代数据集」による検査を補強しているが、同様の数値（B K 78029-B C 5110～4910）となっており現在より7000年前の遺跡で、河南省斐李崗について古い遺跡とされている。

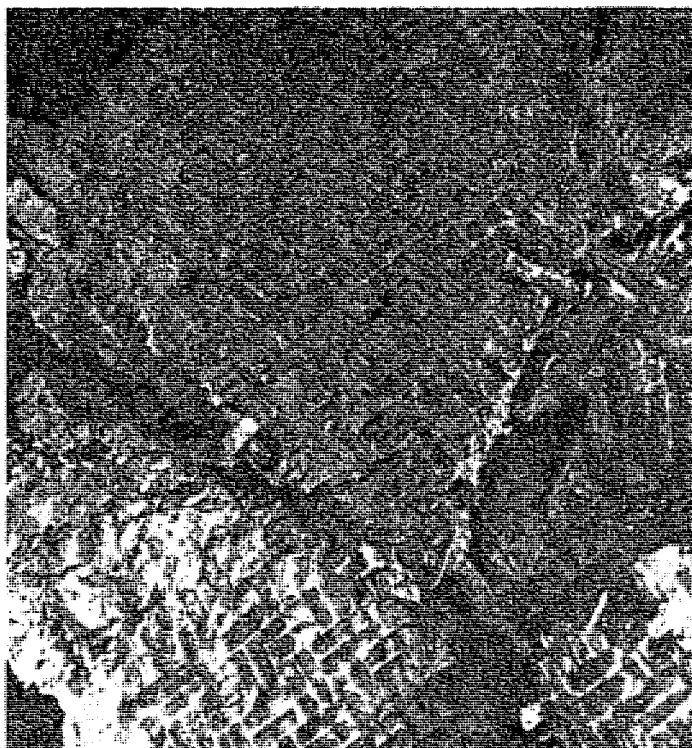
磁山遺跡の土器は焼成低温、胎土粗雑、小石多量（文砂）で文様に縄文が多い。更に泥質硬陶などからみて仰韶文化と対比できるとしている。

縄文についてはくわしく述べていないが、編物の材料を示す資料として注目される。その縄文の圧痕は、広口鉢型土器（孟）や皿型土器（盤）にみられ、中に編織文がある。この編織圧痕についての精細はわからないが、おそらく葦編で、実測図から判断すると中国で古くから伝えられている葦箔とみられ「すのこ状編物」とみてよい。⁽⁷⁾

葦編は浙江省河姆渡遺跡第3層より良好な資料が出土している。報告には写真が添付されているので状況がよくわかり、解説には2経、2緯の編織法と記して詳細はわからない。経2本、緯2本を単位に編織する方法で、材質は葦である。

植物茎を利用した編物は、土器底部の編物圧痕としてみられることがあり、前述の滋山遺跡の葦箔は中国の初見とみてよい。土器底部圧痕は日本では縄文早期にみられるのを初見とする。熊本県下益城郡城南町御領貝塚の一例は河姆渡遺跡第3層の葦編織とほぼ似た状態のアンペラ圧痕である。広義の出水下層式にぞくする山形押捺文土器底部にみられるアンペラ圧痕文は、茎または木材（原体）3本を1単位（幅7.0～75ミリ）としており、経3本緯3本の茎または木材を編む。編む方法としては2本越え1本潜りの方法が採用されている。材質については圧痕は逆カマボコ状を呈し数本の細い条がみとめられるとしているが、植物の茎か、木の割材、木皮かの判断はつかない。

河姆渡遺跡出土の編物の材料も検査の結果を待って判断しなければならないが、編技術からみ



葦 編　浙江省河姆渡遺跡出土

『文物』1980年5号「浙江省河姆渡遺跡第2期発掘的主要収穫」より転写



図2 編物　曾畑A-3 50号貯藏穴綱代

てきわめて似た方法のアンペラ編技法である。河姆渡遺跡からは骨匕（匙）の文様として編織文を施すものが出土（「陽刻編織文図案」としており、曾畠式土器の文様と極似）している。更に紡錘車の出土など、編布、編物について参考になる遺物が多くみられる。

華北滋山遺跡及び華中の河姆渡遺跡における編物の出土は、それぞれ中国における編物技術の伝統が先史時代早期において普及していたことを知る手掛りとなった。特に良渚時代には江蘇省、浙江省など、太湖、杭州湾沿岸の低湿地遺跡で多くの資料がみつかっている。その中で良渚文化期の浙江省湖州市南方錢山漾遺跡は多数の竹編物が発見されている。竹編物出土は第4層の灰黒色の軟質土で黒陶を主とする土器とともに木器類、コメや胡麻などの食用植物とともに出土している。とくに穴状遺構より出土した胡麻種子数百粒は竹編物底下より発見されており、竹編物の用途が明らかとなった。

大湖南岸の吳興一帯は古来竹の産地であった。この地方の竹は「震澤底定、篠簜既敷」（禹貢）とあり「篠」は「筱」で細い竹である。また「箭屬小竹也」で篠竹は箭竹ともよび「東南之美者、有会稽之竹箭焉」と述べている。

錢山漾遺跡では、二百以上の竹編物が出土している。第4層は泥炭層で、しかも竹編物は水面下に位置することから四分の一の資料をとり出したにすぎない。特に注目すべき出土品には曾畠同様網代（竹編器）に芝麻（ゴマ、脂麻）数百粒が発見されている。おそらく遺跡の状況から見て曾畠貝塚低湿地遺跡の如く保存施設からの出土と考へられる。編物の多くは磨かれたヒゴで編まれているが、一部では加工されない竹を使用したものもある。竹は直径2.5センチ未満のものが多く、現在杭県一帯のシノダケに類似しているとみている。

竹編物は魚具としての「倒梢」や建物に使用する「竹蓆」、物入れ運搬、農作業などに使用する「籠」「手籠」「箕」などである。一部のものには、口の部分に細かい文様があり、下半分には平たいヒゴを使っており、現在杭州で使用している籠に似ている。特に「梅花眼」や「辯子口」のように高いレベルを必要とする。

編技術は多様で分類すると下記の如くである。

(1) 一経一緯人文字模様に仕上げる。ヒゴは細くて薄い。円形、橢円形の枠を作り密に織る。「団簾」「簾簾」に似て「楊器」（コメ、ヌカをおとす）「晒器」（ゴマなどの顆粒を晒す）「養蚕」にも使用される。

(2) 二経二緯（多経、多緯も含む）、ヒゴは太く節をとっていないものもある。竹蓆としての用途が考へられる。

(3) 梅花眼、3組の「稀朗」とむらなく平行に並んだ竹ヒゴを織り合せて花模様を作る円柱形の籠、「刀籠」に似ている。

(4) 菱形花格 緯の密な平行線と経の粗なヒゴが交鎖して形成している。

(5) 密緯粗経十字文、もっとも数の多い竹編物で出土編物の半数を占める。緯は細かい竹ヒゴを密接して編み、経のヒゴは1または2を使用し、間隔は大きい。種類は「籠」「簾」「籃」などがある。

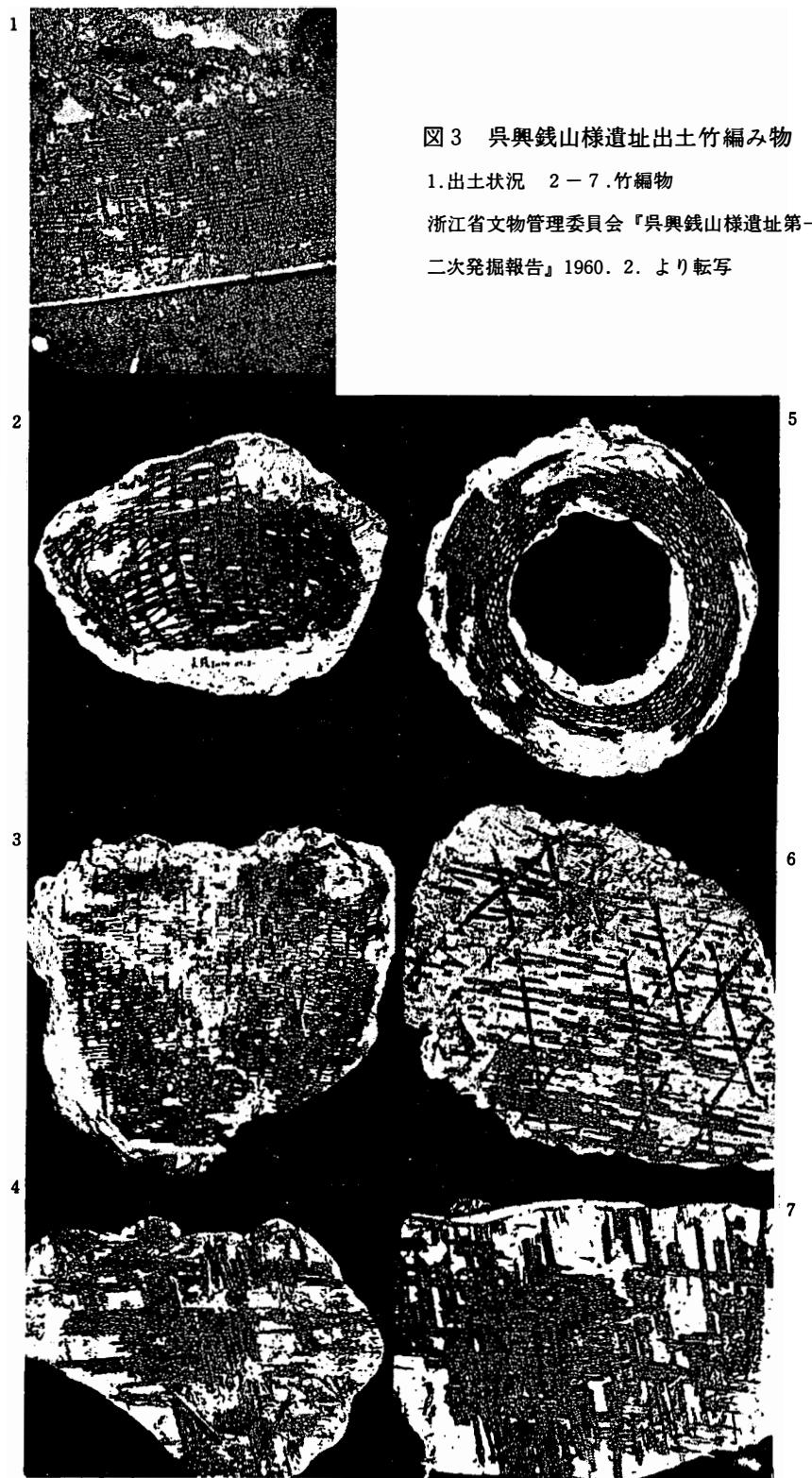


図3 吳興錢山様遺址出土竹編み物

1.出土状況 2-7.竹編物

浙江省文物管理委員会『吳興錢山様遺址第一、
二次発掘報告』1960. 2. より転写

第2節 考 察

- (6) 竹縄、3本の竹ヒゴをもみ合せて作ったもので直径3センチ、長さ16.3メートル。
- (7) 草編物、第4層 12穴より発見された帽子状の細かな編物で原料については未確認。

この他編布も数多く出土し、材料、編技術などについて研究資料となった。錢山漾遺跡は黒陶を主として出土し、良渚文化に編年され、出土植物などによる¹⁴Cの年代測定により、最高紀元前3310年（炭化コメ）、新しいデータとしては紀元前2075年（竹縄）という年代が出されている。

(10)

杭州市水田畈遺跡は下層第4層に黒陶や灰陶を出し、上層第3層からは印紋陶及び釉陶を出土する。のことから良渚文化と湖熟文化の二時期とすることができます。第4層には多量の植物種子が発見され特に灰杭中より印紋陶、灰陶に混入して竹編物が出土していることは注目される。この編物は実測図が付されているが幅に違いのある竹材を2経、2緯編技法としている。報告書には「籃子」の残片にみえる、として復原図を付して説明している。

中国長江流域周辺の先史遺跡からは数多くの編物が出土しているが材質、技法について精察されたものは必しも多く報告されていない。これまでのところ葦などの草編物、竹編物が目立つ。竹編物は材料が豊富であることと、低湿地帯における最適の材料であることによって数多く選択されたものと考えることができる。

さて中国長江流域は西日本一帯の気候に類似し、常緑広葉樹林、一部に落葉樹をふくむ照葉樹林帯である。これらの植生には編物の材質として適當なものが多いと思われるが、果して数多くの資料が出土している。これら先史時代の編物材料についての充分な研究は今後の課題である。このたび曾畠貝塚低湿地遺跡の調査によって植物纖維をもとにして編物、編布の一部にイヌビワ、アケビ、カシ類、ケヤキなどが材料として使用されており、常緑、落葉樹林の一部が対象とされていることが明らかとなった。また轟式土器文化層下の第16層の木材と、一部第12層（轟式）の流木に針葉樹林が存在していたことなど、植生の問題に木材遺体そのものからの割り出しが可能になった。このような検査結果は半島、大陸、特に中国長江流域低湿地帯の考古学研究に大きな研究課題となろう。

わが国の編布、編物の問題については渡辺誠の研究によるところが多いが、その材質研究についてのカジノキ（楮）の原流を東アジアとしたとする説を江坂輝彌は立てている。このことは『広州記』（斐端）にみえる^{たけ}（コウゾ）の製作に同じで、江坂のタバの文化に広がりをもつという見解が次第に明確化されることになる。ここに江坂輝彌の研究に敬意をあらわしたいと思っている。

注

- (1) 渡辺誠 「スダレ状圧痕の研究」、『物質文化』、26 、1976
- (2) 朝日新聞社刊『週間朝日百科』96、「世界の植物—編物と染め」（吉田光邦、「織りの文化と系譜」1977
- (3) 渡辺誠 「編布およびカゴ底圧痕について」『野々市町御経塚遺跡』、1983

第IV章 分析・考察

- (4) 邯郸市文物保管所、邯郸地区磁山考古队短训班「河北磁山新石器遗址试掘」『考古』1977（6期）
- (5) 安志敏、「斐李岗、磁山和仰韶—试论中原新石器文化的渊源及发展」『考古』1979（4期）、河南省开封地区文物管理委员会编『斐李岗文化』1979
- (6) 中国社会科学院考古研究所、文物出版社编『中国考古学中碳14年代数据集1965-1981』、1983
- (7) 河姆渡遗址考古队「浙江河姆渡遗址第2期发掘的主要收获」『文物』1980（5期）
- (8) 下村悟史 「押型土器底部のアンペラ状压痕の一例」『古代文化』28、1976
- (9) 浙江省文物管理委员会「浙江钱山漾遗址第1、2次发掘报告」『考古学报』1960 2
- (10) 浙江省文物管理委员会「杭州水田畈遗址发掘报」『考古学报』1960 2